

## ALISE 2023 参加報告

岡田 大輔  
(相愛大学 講師)

### Report of “the ALISE 2023”

By Daisuke OKADA  
(Lecturer of Soai University)

## 1 ALISE (図書館情報学教育協会)

2023 年の 9 月 28 日から 10 月 6 日まで、ALISE の大会 (ALISE 2023) で発表するため米国のミルウォーキーを訪れた。ALISE は “Association for Library and Information Science Education” の略で、そのまま訳せば図書館情報学教育協会となる。日本ではあまり知られていないように感じるが、1915 年にアメリカ図書館学校協会 (The American Association of Library Schools, 以下、訳は全て岡田による) として設立された 1) 歴史のある団体である。とは言え、ここで発表することにしたのは、自身の研究内容に 1 番近いであろう学会というだけである。私はこの大会に参加するのははじめてで、ALISE がどのような位置づけの学会なのか十分には分かっていない。

### 1.1 大会テーマ: 「現場での実践」「司書に求められる能力」「実際の授業」を埋める

大会のテーマは「ギャップを埋める: 教育・学習・実践・コンピテンシー (Bridge the Gap: Teaching, Learning, Practice, and Competencies)」であった。大会の web サイト 2) にある文を要約して翻訳すると、

私たちは教育者として、実践とコンピテンシーをどのように教育に組み込めばよいのでしょうか? ALA の「図書館員のコアコンピテンシー」やカナダ研究図書館協会の「21 世紀の図書館員のコアコンピテンシー」など世界中で様々なコンピテンシーが規定されています。また、「図書館員のコアコンピテンシー」の 2021 年案などには、「社会正義」が含まれています。これらは図書館情報学の教育理論にどのような影響を与えるのでしょうか? インターンシップの位置づけや、理論と実践、実務家育成と修士教育の間にもギャップはあります。ALISE 2023 では、それらのギャップを明らかにし、実務家と LIS 教育者が話す場、良い教育を行えるようにする場を作りたいと考えています。情報技術やデータサイエンスも含め、図書館情報学教育に関連する論文や発表を歓迎します。

となる。ただ、「大会のテーマに基づいて発表の審査を行うわけではない」ともされている。

## 1.2 研究の場であるとともに、仕事を見つける場でもある

受付の際には、名札とともに「ポスター発表者」と「初参加者」のリボンがもらえ、名札の下に貼る(図1)。望めば「仕事探し中」「人材募集中」のリボンを貼ることもできる。日本の学会も同様の機

図1 名札と“Poster presenter”“First timer attendee”のリボン



能は持っているが、より積極的にアピールすることが許されていると共に求められているのだろう。

## 1.3 オプションの勉強会と初参加者の会

初日は午後からで、まずはオプションの勉強会に参加する。これは別料金で25ドルかかる。みんなが自己紹介していったりするが、私としても人脈作りや英語の練習として参加しているのでちょうど良い。内容はオープン教育リソース、世界中で教材を共有する取り組みについてで、私も日本の現状や可能性について発言した。ただ、日本ではほぼ使われていないとしか言えない。

次は「初参加者の会」(図2)で、これは参加費に含まれている。簡単な飲食物が準備されているだ

図2 初参加者の会



けで、何かイベントがあるわけではない。大会はハイアット・リージェンシー・ミルウォーキー、つまり高級ホテルで行われていて、最上階からの展望が楽しめる。

初日はこれで終わりである。ここに泊まったら1泊2万円はするので、市バスに乗って、郊外の民泊に泊まる。それでも1泊50ドル、8,000円はする。円安なので全てのものが高い。

## 2 口頭発表

翌日は ALISE 会長の挨拶や記念講演の後、口頭発表が行われた。口頭発表は 2 日間にわたって行われ、「査読論文 (表 1)」「査読付き口頭発表 (表 2)」「研究グループ発表 (略, 12 件)」の部門に分

表 1 査読論文部門のタイトル (22 件)

- ソーシャルワークの概念を LIS 学生に教える
- ニュージーランドにおける情報学カリキュラムの現地化
- 2019 ALA/AASL/CAEP 学校司書養成基準に基づいた養成プログラム: コンピテンシーベースのカリキュラム改訂
- 図書館情報学教育者はアクセシビリティを教えているか? シラバスの内容分析
- ESL (第 2 言語としての英語) を超えて: 留学生との文化的コラボレーションを探る
- データサービスにおけるコンピテンシーベースの教育/研修: データサービスの研修と学習成果
- 「つながるには、耳を傾けなければならない」: 現実世界での社会正義の経験を LIS 教育に取り入れる
- 知的自由を超えたプライバシー: 図書館とデジタル自己主権
- コラボレーション情報行動の範囲の検討: 定義とコラボレーションツール
- 共感, 信頼, エスカレートしないように: LIS 大学院生の危機コミュニケーションスキル育成における VR 研修の有効性の評価
- クエリ検索法: 探究ベースのレファレンス情報サービス
- LIS オンライン教育におけるクラスサイズの決定と意思決定
- デザイナーと利用者のギャップを埋める: 健康関連の音声端末のインターフェイスを高齢者と共同でデザインする
- ドイツにおける分野横断的情報教育における倫理的・文化的コンピテンシー育成の支援
- 多様性・公平性・インクルージョン (DEI) における LIS 協会の取り組みと成果: 内容分析・用語分析・トピックモデリング
- 多様性の系統的検討とカリキュラム改善事例: 図書館情報学教育におけるインクルージョンと研究指導への示唆
- ハザードランプの点滅: LIS 教育における破壊的アルゴリズム技術の言説を問う
- 自己の調査: 研究実践における文脈・感情・生活世界
- カナダの LIS 卒業生の専門的コンピテンシー
- 体験学習を用いてデータライブラリアンを養成する教育方法の検討
- ギャップに配慮する: LIS カリキュラムに社会正義のコンピテンシーを組み込むことによる異文化間スキルの育成
- 一貫性が重要: 4 学期制と 2 学期制のオンライン修士 LIS 教育の比較

かれている 3)。発表は複数の部屋で同時に進められるが、部門を超えて似たテーマの発表が続くように配されている。そして最後に発表を通したディスカッションが行われるが、これは日本と同様、必ずしも盛り上がるわけではない。

口頭発表は両方とも査読があるが、発表の質は日本の図書館情報学会と同程度に思われる。内容としては、アメリカでは (でも)、図書館情報学教育のなかで障害者サービスや著作権はあまり教えられていないことが印象に残っている。

表2 査読付き口頭発表部門のタイトル (19 件)

- 総合的なアーカイブを構築できる地方図書館員の研修の開発
- 法律図書館員の謎を解く：次世代の教育と多様化
- あなたが教えるための本を書く
- 政策における公共性の争点：教育者への示唆
- 21 世紀のアクレディテーション：教育・学習・実践・コンピテンシー
- ラテンアメリカや米国における LIS プログラムにおける教育研究方法：専門職養成モデルの比較
- 専門的 LIS 教育プログラムの IFLA ガイドライン：素晴らしい専門的実践ができるコンピテンシー
- オンライン学習における視覚障害・印刷障害 (BVIPD) 学生への公平なアクセス：ギャップを埋めるために、学生・教員・障害者サービス・大学図書館がどう協力できるか
- 反人種差別主義の理論と実践を通じて制度的人種差別に対抗する
- 様々な関わり方：選択・柔軟性・真正の評価を通して、モダリティを超えて学生とつながる
- 新しい ALA の図書館員のコアコンピテンシーを LIS カリキュラムに組み込む
- LIS カリキュラムや教育におけるアクセシビリティと障害：分かったことの共有
- 見ればわかる：教育における厳密さについて話し合う
- 入学前学習の評価：LIS 教育での場合
- 親が大卒でないことの意味：新入世代 (First-Generation) 学生の定義
- iLead: 明日の図書館リーダーの育成
- 著作権と間違いの違いを学ぶ重要性：著作権を教えるプログラムを強化するために
- LISCrit: 図書館情報学教育としての批判的人種理論
- 国際的文脈における LIS ジャーナル出版の脱植民地化：公平性・多様性・インクルージョン・アクセシビリティ・開発格差への対応

### 3 ポスター発表

ポスター発表は「発展途上の研究部門 (表 3)」と「博士課程の学生部門 (略 12 件)」の 2 つに分かれている。私が発表したのはこの「発展途上の研究部門」で、この部門での発表の申し込みはほぼ採択されていると考えられる。

表3 ポスター発表のタイトル (59 件 欠番が存在する)

- #01 プライバシー、知的自由、ラーニング・アナリティクス：専門的価値観と専門的実践のギャップを埋めるオープン教育リソースを用いたカリキュラム
- #02 ユニバーサルデザインによる学術図書館のインクルーシブな環境づくり
- #03 「惜しみなく情報を伝える」人工妊娠中絶が禁止された国で中絶情報がどう共有されるかの調査
- #04 公共図書館への地域資源スペシャリストの導入：事例研究
- #05 図書館員が高等教育においてオープンサイエンス活動を支援する際にどのような教育を行っているか
- #06 「図書館員への道」の研究：1 年目の振り返り
- #07 ケアを中心に：アカデミックの中での実践としての団結
- #08 図書館情報学の教育と実践に批判的障害学を導入する：学位論文の提案
- #09 図書館員のテクノストレスという世界的問題の理解
- #11 1 つではない：図書館情報学で用いられるさまざまなグラウンデッド・セオリー
- #12 Canvas で YouTube を用いることの期待：オンライン教育ビデオと高等教育
- #13 学術図書館と COVID-19

- #14 学生の学習成果の評価は最大限に活用されているか?
- #16 データリテラシーの習熟度とその重要性: 米国とカナダの学術図書館員の認識に関する調査研究
- #17 公共図書館における人種的正義市民参画プロジェクトへの助成の変化理論を用いた論理モデルによる分析: LIS 教育への示唆
- #18 包括的な図書館のリーダーシップ: インディアナ図書館員多様性プログラム終了生へのフォーカスグループインタビュー
- #19 教育者・司書・その他の援助職向けの思春期メンタルヘルス・リテラシーを構築する手法の分類
- #20 アジア太平洋地域の iSchool におけるデータサイエンス教育
- #21 米国のアーカイブ関連機関は 50 州の政治的傾向に基づいて Web サイトで「社会正義」をどのように表現しているか?: 探索的なコンテンツ分析による識別
- #22 支援のギャップを埋める: 図書館での若者のメンタルヘルス向上に対する YA 司書の認識や経験の調査
- #23 身体の活用, 身体の悲しみ\*1
- #24 地域データキュレーションのカリキュラム開発
- #25 情報学教育における質的研究法と実践をつなぐ
- #26 教員と学生の研究協力: LIS 学生の学習強化と機会創出
- #27 図書館員の専門性についての概念: 言説と実践のギャップを埋める
- #28 Q メソッドを用いた図書館員のリーダーシップ理解の調査
- #29 どんなムード?: フィクション作品における言語を超えてのムードの描写
- #30 体験学習を通じて図書館リーダーシップ能力を育成する: 非同期環境でのスキャフォールディング
- #31 データサイエンスのカリキュラム: 北米の LIS スクールと iSchools の分析
- #32 大学教育におけるデータリテラシー教育の構築: 現在の取組と学術図書館員の認識に関する調査
- #33 ビーズ手芸のライブラリアンシップ\*2
- #35 「図書館とは? チャータースクールの責任者への学校図書館サービスに関する調査
- #36 LIS 教育と実践の統合: ハイブリッド内容分析アプローチを用いたニューベリー賞受賞作品における反黒人性の発見
- #37 慢性疾患を自己管理する音声作動型会話エージェントの開発: 統合医学用語システムを用いて
- #38 メーカー・スペースでの学習を促進する図書館員の実践の調査
- #39 はやりのダンスだけじゃない: TikTok を使った Z 世代の社会変革の動機と方法を探る
- #40 コミュニティ・エンゲージメントの調査: 図書館におけるソーシャルワークのエスノグラフィー
- #41 新しい技術が図書館情報学教育における偏見を解消する?
- #42 図書館情報学教育における先住民の学生 (1990–2019 年): 過去の傾向と将来の進歩への示唆
- #45 生涯にわたるコンピュータリテラシーの育成を支援する専門的な技術知識の構築: MLIS の学生と教員による研究プロジェクト
- #46 権力と論争: 米国の公共図書館における資料への挑戦に関する研究
- #47 LIS 専門職のコンピテンシー構築におけるデータリテラシーの役割
- #48 ソーシャルワークを含む情報リテラシーコースの設計を通じた図書館司書のコアコンピテンシーの広がり: 現場からの考察
- #49 障害やアクセシビリティは図書館情報学のカリキュラムのどこで教えられているか?
- #50 ネイティブ・アメリカンが健康情報を求める行動の調査: 文化的省察のレンズを通じた分析
- #51 ソーシャルメディア上でのソーシャル・ノイズを用いた不確実性の軽減
- #52 成績評価が学生の学習に与える影響の調査

---

\*1 身体性の体験の発表

\*2 先住民で司書に就いている人へのインタビュー調査

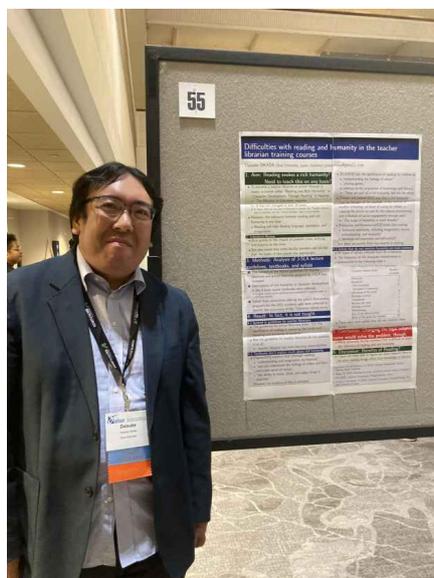
- #54 図書館での図書館案内や映像制作を通じた子どものデータリテラシーの育成
- #55 司書教諭養成課程における読書と人間性の難しさ
- #56 LIS コアカリキュラム, テクノロジー・アジリティ, インストラクショナル・デザイン: 再考
- #57 青少年は政治情報を社会的にどのように活用しているか
- #58 ギャップを埋める: 現代の図書館における公平性・多様性・インクルージョンを保障する計画
- #59 視覚障害者が視覚に頼らずスマートフォンを用いる場合の情報検索行動の調査
- #60 大学卒業率に対する大学図書館の支出の影響
- #62 今の図書館経営にLはない。ただ、あるべきだ\*3
- #63 仮想空間から得たファッション博物館学のインスピレーションと対応準備
- #64 医療における人種差別の可視化
- #65 韓国の大学生のニュースリテラシーに関連する要因の関係
- #66 GIS と ChatGPT を活用した社会サービスと高等教育
- #67 そのためのリソースはあるか? 学校司書の専門性を育成するチャットボットの開発
- #68 メンタルの不調を経験した大学生の情報行動と困難の理解

そして、表3から分かるように、ポスター発表は図書館情報学教育とほぼ関係ないテーマも見受けられる。ただ、I-LISS のインドでの大会 4) や韓国での大会 5) のように、コンピュータサイエンスが中心を占めるわけではない。

### 3.1 自らの発表

私の発表(図3)は、「#55 司書教諭養成課程における読書と人間性の難しさ (Difficulties with

図3 筆者の発表の様子



reading and humanity in the teacher librarian training courses)」で、内容をまとめると、

---

\*3 L はリーダーシップを表していると思われる。

日本の司書教諭科目「読書と豊かな人間性」において、「読書」と「豊かな人間性」の関連を授業でどう扱っているか調査した。全国 SLA が作成した『学校司書のモデルカリキュラム』講義指針」では「児童生徒の心を育て、豊かな人間性を養うために読書が果たす意義」と触れられていたが、「学校図書館司書教諭講習講義指針」では全く触れられていなかった。全ての教科書では触れられているが、読書と人間性の一部との関連性を説明する程度であった。学校司書のモデルカリキュラムを開講する大学の 55 種類のシラバスのうち、人間性といった言葉が含まれているのは 25 大学だけだった。多くの大学教員が、「読書」と「豊かな人間性」の関連性を授業で教えるのは難しいと考えていることを示唆している。

と新しく始めた研究の最初の部分となる。発表を申し込むことで締め切りができ、自分を奮い立たせて研究を進めることを狙っている。

一応は「豊かな人間性」というコンピテンシーを扱ってはいる。ただ、内容は思ったほどは伝わらなかった。会場内での場所が悪かったこともあるが、多くの人に興味を持ってもらい、いろいろな人と議論することはできなかった。また、ポスターを貼る際に、運営に加わっている中国からの留学生に手伝ってもらったが、「日本では『読書と豊かな人間性』という科目がある」と私が言ったのに対して、“That’s good” との返答であった。「読書が人間性を高めることが前提になっている気持ち悪さ」は簡単には共有できないようである。

### 3.2 ポスター発表をしながらの懇親会

面白いのは、ポスター発表の会場と懇親会場が同じであることである。ポスター発表が始まっていくらか経つと、立食パーティの準備がなされる。これは、情報メディア学会の大会でも行われていたことがあるが、良い方法だと考える。ただ、ここでの料理は軽食で、酒類は別料金で 1 杯 8 ドル払うことになる。もちろんアメリカなのでチップは必要で、つまりお酒は 1 杯 10 ドルかかる。

## 4 大会についての印象

### 4.1 参加費は高い

その他、出版社による企業展示や、年次総会、表彰式などがあるのだが、大会で行われるのはこれぐらいである。4 日目は理事会だけなので、実質的には 3 日間の大会である。他の国際学会のように昼食が無料が出るわけではないし、学校図書館系の学会で行われるような図書館見学ツアーもない。

それでいて、参加費は 400 ドルもする。そして、これは“北米以外からの参加者”の割引料金で、定価は 575 ドルである。

### 4.2 外国からの参加は少ない

参加者はトータルで 150 名程度だと思われる。そして予想していたことだが、3 日間の参加を通して日本からの参加者と会うことはなかった。また、予稿集を見る限りは、アメリカ・カナダ以外から

の発表は少ない。ファーストオーサーの所属で見れば、ニュージーランド(査読論文)と南アフリカ(査読付き口頭発表)からの発表,そして私の発表のみである。「1983年,ALISEは海外の会員にも拡大された6)」とあるが,20年ほど前の国内の文献7,8)はいずれもALISEを米国図書館情報学教育協会と訳しており,国際学会と言えるほどの広がりは今でも見られない。

ただ,ポスター発表では,中国や韓国出身でアメリカの大学に通っている大学院生の発表は多い。20年後にはいくらかの留学生は自国で教育に携わり,北米式の教育がより導入されていくだろう。日本にはその動きは見られない。

## 5 ミルウォーキーの公共図書館

地元の公共図書館も訪れることができた。

### 5.1 Capitol Branch (公共図書館分館)

1つは泊まったところの近くにある, Capitol Branch (図4)である。たまたま近い時期に行った

図4 Capitol Branch と, 図書館から出たところの風景



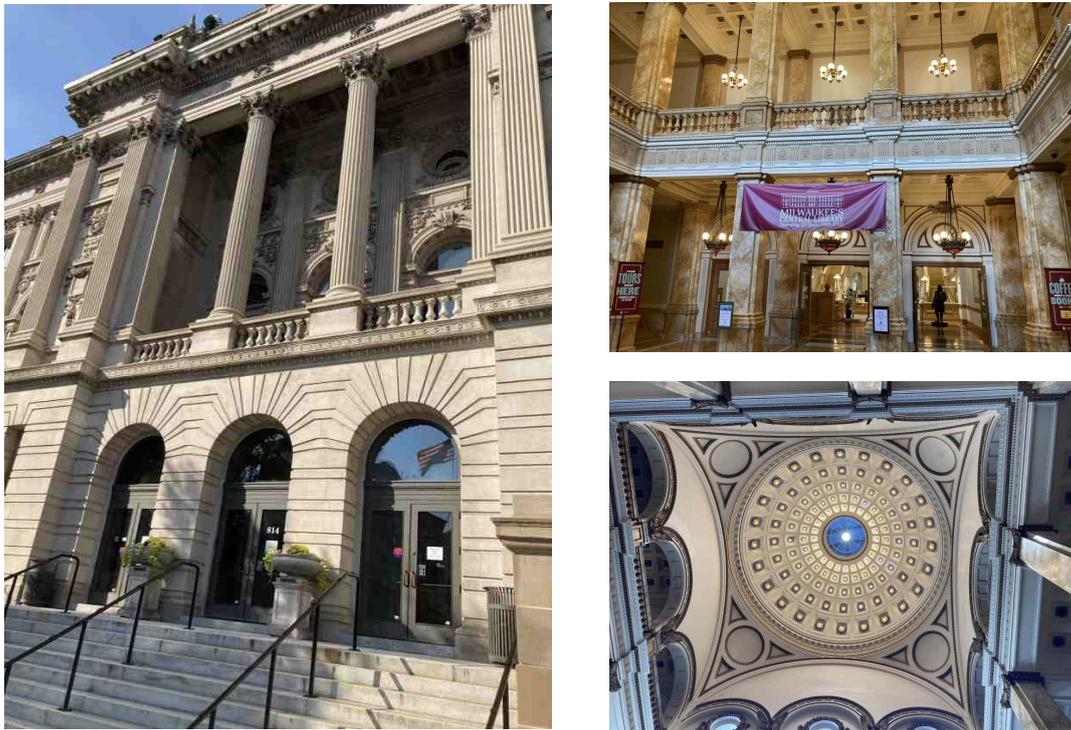
ため印象が残っているのもあると思うが,館内は国内で言えば岩手県の紫波町図書館に似ている。ただ,館内を見る限りは特別に感じるものはなかった。

「中で写真を撮っていいですか」と返却カウンターの係員に聞くと,「それはライブラリアンに聞いてください」と言われる。職階があることを改めて実感する。重々知っているつもりではあるが,ついカウンターにいる人に聞いてしまう。

### 5.2 Central Library (公共図書館本館)

本館(図5)には日を分けて2回行った。いかにも伝統的なアメリカの図書館という感じで,立派なロビーが迎えてくれる。人文社会科学室・芸術音楽室・貴重書室がある立派な図書館である。ただ,こちらもアメリカのこの規模の図書館とすれば一般的なサービス・運営であると考えられる。雑誌架の空きは多く,紙の雑誌の購入点数が減っていると予想される。メディアルームのCDやビジネスコモン

図5 Central library



ズのビジネス支援はそれほど活用されているようには感じない。

面白かったのは、はじめて図書館を訪れたとも思える若者2人組がおり、見るもの全てが珍しいのかいろいろ声が出ていた。私には微笑ましく感じたのだが、いくらかすると警備員に静かにするように言われる。今のアメリカでも図書館は静かにするところのようである。

### 5.2.1 デジタルデータで持ち帰れるスキャナ

館内にはスキャナが設置されており、館内の資料をデジタルデータで持ち帰ることができる。日本の著作権法ではできないことである。

ただ、このスキャナは韓国語・中国語簡体字・中国語繁体字・ベトナム語など25もの言葉に対応しているのだが、日本語には対応していない(図6)。これは、この図書館が決めたのではなく、メーカーが決められていると考えられる。そして、この街やアメリカでの話者数よりは、アメリカ以外でもこの製品を売るつもりがあるかが影響しているのだろう。そう考え、日本に戻った後、SNSで販売元へ連絡したが、今のところ返事はない。

### 5.2.2 児童室

児童室は図7のように内部から上まで登れる灯台を模したものがある。また、パソコンがいくつも配置されており、これは館内の他の部屋では見られなかった。素直にとらえれば、「情報機器を持っていない子どもは多いが、今の時代なら大人に対してたくさんのパソコンを準備しなくてもよい」と

図6 日本語は対応していないスキャナ

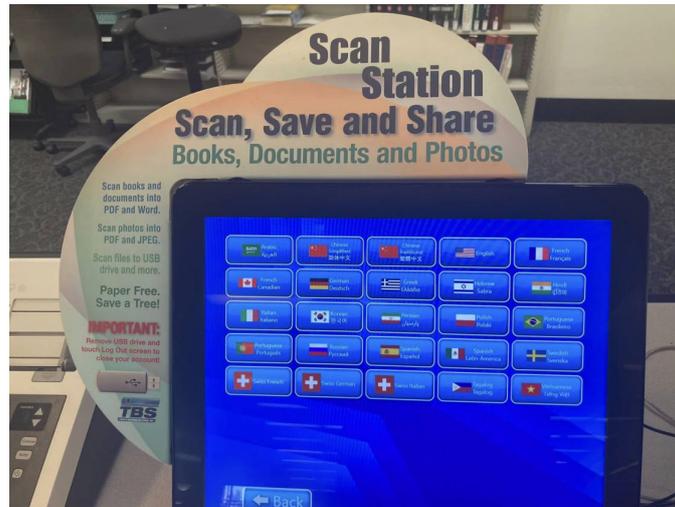


図7 児童室



考えたのであろう。

## 6 終わりに

発表をするのであれば、ALISEの大会は参加する価値のある大会だと考える。また、帰国後も査読委員への招待などもあり、人脈ができることにつながっていくだろう。

次回のALISEは、2024年10月14日～17日に「真実や情報の倫理と進化」をテーマにオレゴン州ポートランドで開催される10)。

## 参考文献

- 1) “Association for Library and Information Science Education (ALISE),” *The American Library Association Archives*. <<https://archon.library.illinois.edu/ala/?p=>

- creators/creator&id=3892>. [引用日: 2024-02-26]
- 2) ALISE, 2023 ALISE Annual Conference. <<https://www.alise.org/2023-alise-annual-conference>>. [引用日: 2024-03-05]
  - 3) 2023: *ALISE Proceedings*. <<https://doi.org/10.21900/j.alise.2023>>. [引用日: 2024-02-26]
  - 4) 岡田大輔 「I-LISS 国際大会のプログラムの分析: インド国際大会」2022 年度 I-LISS Japan Chapter 研究大会での口頭発表 2022 年 12 月 10 日. <<https://researchmap.jp/yansenmu/presentations/40694238>>. [引用日: 2024-03-05]
  - 5) 山田美雪 「I-LISS 国際大会のプログラムの分析: 韓国国際大会」『Journal of I-LISS Japan』5(2), 2023.3, p.39-50.
  - 6) *op. cit.* 1).
  - 7) 酒井由紀子. 「北米の図書館情報学教育の現況 (海外の図書館情報学教育に学ぶ)」『情報の科学と技術』52(7), 2002, p.354-363.
  - 8) 永田治樹 「パンダ・シンドロームの脱却」『アーカイブズ学研究』1, 2004, p.70-76.
  - 9) TBS, TBS – Today’s Business Solution. <<https://tbsit360.com>>. [引用日: 2024-02-29]
  - 10) ALISE, 2024 ALISE Annual Conference. <<https://ali.memberclicks.net/2024-alise-annual-conference>>. [引用日: 2024-02-26]